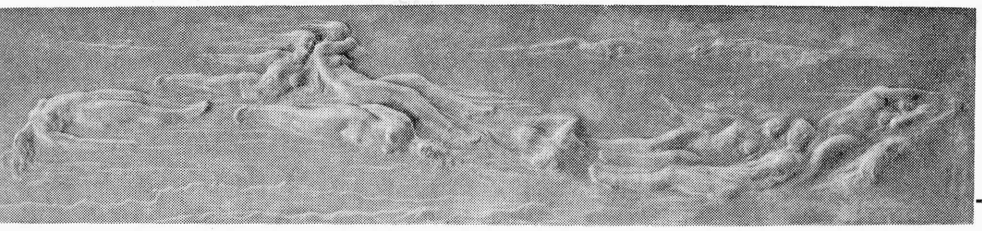
京都大学附属図書館報



静脩

1977年6月
Vol. 14, No. 1

The Kyoto University Library Bulletin

京大図書館への期待

前教育学部教授　小　倉　親　雄

このたび京都大学を停年退官し，この大学との公的なかかわりからは解放された時点で，とくに深い関心を持ちつづけてきた図書館に関することどもが，学生時代をも含めて，いましきりにしのばれてならない。

それにしても忘れがたいのは，昭和11年の1月24日，おし迫った卒業の日を前にして附属図書館の閲覧室が焼失した時のことである。そのとき私は文学部史学科の3回生であったが，現在の文学部陳列館がそのまま当時は史学科の建物であった。したがってこの閲覧室とは至近の距離で相向って位置し，また歴史関係の図書，資料には，附属図書館に依存する面が少なくなかったために，この図書館は私の学生生活に深い関連を持ちつづけてきた。私が急を知って駆けつけ，ぼう然とその焼跡に立ちすくんだのは，すでに建物は焼け落ちて，余じんから立ちのぼる湯煙が附近をおおっていた正午間近の時刻であったが，職員の後片づけを手伝いながら，それから後のことを気遣い，いろいろに語り合ったことがいまもあざやかに思い起こされる。そして卒業後私自身がやがて図書館と道を共にするに及んで，外部に在りながらも，京大図書館その後の足どりは，しぜん関心を引かずには措かないものであったが，さらに昭和24年の末以降は，自身この図書館の職員に加わり，そのあと新しく教育学部に設置された図書館学講座にかかわり，在職中を通じ何んらかの形で図書館との結びつきを保ってきた関係から，いままた退官とともに，新たな感慨につきまとわれる。

焼失した閲覧室は明治32年の建物で，本学の設置が決定されると同時に構想され，2年後に建築されたものであった。すなわち当初予定されていた4分科大学のうち，まだ理工科大学のみしかなく，1・2回生を合わせての学生数は僅かに70名，全学蔵書が4万冊をやや上回った程度のときであった。したがって優に150の座席を置くことのできたこの閲覧室は，在学生の倍数を同時に収容してなお余裕を残し，大正13年現在の本部大ホールが新築されるまでの25年間，大学にとっての主要な式典・行事の都度，その式場に転用されたほど，本学草創期においては主要な建物であった。それは図書館に対する理解のきわめて深く，その便宜を優先し，整備・充実に意を用いた初代木下総長の努力によるものであった。

しかしながら，草創期におけるこの主要建築も，その後の37年間，増築・改修はもちろんのこと，内装的にもほとんど新たな手を加えた形跡のない平屋建で，閲覧机もすでに古色にまみれ，椅子も竹のすのこ張りの安定性を欠くものが多く，全学蔵書数はすでに，110万冊を超過し，附属図書

館のそれも28万冊に近く，学部学生も4,000人を数えるにいたったこの昭和11年の時点にあっては，すでに記念物的な存在であり，その機能に期待し得る面はきわめて限られたものであった。このような欠を補う措置として昭和8年以来，法経第4教室の2階を第2閲覧室と名づけ，指定書・辞書類などを安全開架制のもとにおいて，臨時に200余席を準備することになっていたものの，時間を区切って受けつけ，100メートル以上も距った書庫との間を，雨の日は傘をさし，図書の出納に当らねばならなかった図書館職員の姿に接することは，われわれ学生にとってもまことに忍びがたいものであった。同時にまたこのような実状は，とくに蔵書の大，ついで職員・学生の増加と，図書館利用の便宜双方の間に，いよいよ拡大されてきた大きな亀裂，そのアンバランスの象徴的なものを見せつけられる思いでもあり，また大学図書館の在り方について考えさせられることの多いものであった。

昭和11年における閲覧室の焼失は，このような情況をさらに倍化し，そのアンバランスを極限の状態にまで拡大した。幸い事務室・書庫への類焼は免がれ得たものの，3,000冊に近い参考書類が被災し，カード70万枚を越える閲覧用目録が烏有に帰して，検索の鍵を奪われてしまっては，何人とも堪えがたい感を深くした。そしてこの閲覧室に代るところとして，急拠3月末までの暫定期間，法経第4教室を充当することになったとはいうものの，しよせんそれは教室であり，座席のみをもつ単なる空間にすぎず，図書館の便宜という限りにおいては，ほとんど満たされることのない，まことに索莫たる思いを抱いて卒業して行った記憶がいまも生々しい。そして卒業した年の9月からは，本部大ホールを仮閲覧室に使用することになったが，それも昭和14年3月をもって打ち切られている。その後は戦中・戦後に連なる時期であったとはいえ，図書館の便宜はいわば極限・最悪の条件下におかれ，書庫と閲覧室との隔絶，図書館機能の半身不随的状況は結局20年間に及んでいる。すなわち昭和30年12月，現在の新書庫5階が完成し，ここに予定の図書を収納し終った時点で，この状況は部分的には解消されたが，しかしながら附属図書館現在の建物は，昭和10年頃の実状を背景とした規模をさらに3分の2程度に縮小して成ったものである。したがって今日に至る間にはすでに40年の歳月が介在しており，その間全学蔵書はやがてその4倍に近く，学部学生の数だけでも当時の3倍近い数字を記録するに至った現時点からすれば，すでに相当過去の時代に所属するものとなった。

一方本学の蔵書は昭和8年，ちようど私が入学して間もない頃，100万冊を突破したことが報ぜられた。そして建物・施設こそまことに貧弱だが，蔵書数においてはまさに東洋一との声をしばしば聞かされたが，蔵書の大が施設・機能の不備・弱体をカバーしているかのごとくに聞こえるこのようなことばは，学生たちの耳にも何かしら空々しいものであった。この昭和8年という年は，本学創立から36年，しかしその数字が200万冊に達するのに要した年数はそれより10年少い26年目の昭和34年であり，さらに300万冊にはその半数にも満たない12年目の昭和46年，そしておそらくは昭和55年前後の年をもって400万冊に到達するものと予想される。このように創立後83年にしてこの大きな数字を記録しようとしている京都大学は，アメリカでは3番目に古いイエール大学が，これと同じ冊数を記録するために200年以上の年数を必要としたのと比較しても，まさしく驚異的なものといえるであろう。

蔵書はどのような経路をたどってその大学に帰属することになったとしても，それを共有の財産とし，管理・運用の全学的効用を図る前提のもと

に，どの大学もその歩みをつづてきたといえるであろう。京都大学80年の歴史の中にも，そうした証跡が，それぞれの段階において記録されている。すなわち大正2年には，時の沢柳総長自らがきわめて積極的に対処しようとしたいわゆる「図書統一問題」があり，それは16年後の昭和4年，新城総長によって引きつがれ，全く同じ趣旨のもとで再び採り上げられ，審議に附されている。全学の蔵書がそれぞれ32万・84万冊に達し，そのうちの8割近い25万・65万冊が，各部局を始めとする学内各所に置かれていた当時のことである。そしてそれら各所には研究上不可欠なもののみをとどめ，他を中央館に集中するとともに，合わせて図書業務の統一を図ろうとするものであった。要するに学内各図書館単位の蔵書実績のうちから，必ずしも研究上不可欠としないものを物理的に集中化して行くことによって，全学的効用を志向するものであり，とくに昭和4年における「図書館新営案」はその集中化を前提としている。したがってそれは，中央館に依存し得る面を大きく打ち出し，各図書館単位においては，真に不可欠なもののみの収集累積を可能にし，専門集書としての高次の蔵書構成を援助し得る積極的な体制を整えようとするものではなかった。このことがいまきわめて印象的に思い起こされる。

戦後図書館の制度・行政・運営の改善について，今日に至る間，その重要課題が相ついで採り上げられてき，慎重な討議に附されている。私は新たな飛躍に対する期待をこめ，また本学図書館の歴史を顧み，何よりもまず現在・将来における蔵書の大と，図書館利用の全学的便宜とのバランスを，そして学内各図書館単位における専門集書としての健全な発展を心から念ずるものである。

Journal Citation Reports について

—紹介と実際に使ってみて—

理学部・物理学図書室　慈　道　佐　代　子

最近附属図書館に，Journal Citation Reports (1975年版)（以下 JCR という）が備えつけられた。これはアメリカの Philadelphia にある Institute for Scientific Informations が出版している自然科学全般の雑誌に関する利用統計書である。今回の版は，1969年の data に基づいて作成された予備版を更に充実した形で1974年までの data を収録しており，Science Citation Index（この詳しい記事は「静脩，Vol. 13, No. 1, 1976年9月号」を参照）の新しいセクションとして付け加わっている。

JCR は ① Journal Ranking Package, ② Citing Journal Package, ③ Cited Journal Package と3つの package で構成されており，これらは個別ではあるが，相互に関連のある形で提供されている。JCR がどんなものかを，後で述べる物理学教室の調査に利用した ② Citing Journal Package を例にとって説明したい（図1参照）。この図は，1974年出版の Annales of Physics が引用した雑誌の引用回数を各雑誌の出版年度別に示したものである（但し，1つの論文内で同一論文の引用は1回と数える）。例えば Physical Review Letters についてみると，1974年出版のものは3回，1973年のものは30回引用されていることになる。そして total は1974年出版の Annales of Physics が1974年までに引用した雑誌の総引用回数で3029（＊印がついている）になる。又，各雑誌の頭にある数値は，その雑誌に掲載さ

れた各論文が JCR に収録されている各雑誌によって引用されている回数の平均値である。このように JCR は，雑誌の引用と被引用に基づく一連の統計表であり，これを利用することにより，科学雑誌文献とそれが科学者の間で情報伝達システムとして果す役割を研究するために有用である。

JCR を使って，去る51年10月理学部物理学教室において，雑誌に関するアンケート調査を行なった。調査の概要は次の通りである。

i）目的：JCR を利用して当教室にとって最も適合した雑誌の構成，及び収集計画について検討する。

ii）対象：物理学第一・第二両教室の研究者260人（教官，院生，研修員）。回答者は211人で回収率約81.2%。

iii）手続き：①各人の研究上重要なものから上位3タイトルを A, B, C の順位をつけてあげる。②各人から出された3タイトルずつの雑誌を A, B, C に適当な重みをつけて研究室単位（23の研究グループ）に集計し，最上位をその研究室の core journal とする。③ JCR を使って各 core journal が引用している雑誌の引用比率を出す。④それらの各雑誌について③の引用比率を集計する。

このようにして得られた被引用比率の和の数値によって，core journal を利用する場合の各雑誌の重要性の度合いを推定することが出来るのである。Citing Journal Package で core journal の被引用雑誌を分析してみると，自己引用度の高いその core journal 自身とその core journal の関連分野の雑誌，及びいくつかの広範な学際的広がりをもっている雑誌が上位を占める傾向にある。故に，この core journal 群に対する被引用比率の和の高い雑誌は，自己利用度が極端に高いか，又は各 core journal との関連性が強いものかのどちらかである（図2参照）。

iv）結果と考察：手続き①の結果を A, B, C に適当な重みをつけて雑誌毎に集計したもの（研究者の要求度）と core journal 群に対する各雑誌の被引用比率の和の数値を絶対値から序列におきかえて相関をみた（図3参照）。この図をみると，4つのグループをつかむことが出来る（図4参照）。グループⅠは，45°の対角線上周辺にあり両者の相関性が強いものである。グループⅡは，JCR では高い数値であるが当教室の要求は少ないもので，このことは自然科学全般では popular でも物理分野との関連が弱いものといえる。グループⅢは，JCR では低い数値であるが当教室の要求は高いもので，物理固有の雑誌であるといえる。グループⅣは，JCR が“0”の線上のものである。JCR に収録されていないものもあるが，極めて専門的で特殊な雑誌であるということが出来る。

この図3が，今回の調査で最も得たかった結果である。というのは，この図から何を優先的に収集しなければならないか，当教室で収集している雑誌がどういう性格のものか，あるいは図中に示されているように中止した雑誌が教室全体をみてどうだったか，等“わかる”ということである。

しかし，この JCR も完全な統計書ではない。引用頻度は，著者の名声，言語の問題（例えば日本語，ロシア語等はハンディがある。），雑誌の普及度，等に左右される面があり，科学的価値以外の要素も含んでいる。又，分野による引用の仕方の違いに注意しなければならない。例えば Journal of American Chemical Society と Annales of Mathematics とを，引用論文数の違いや論文の寿命を考慮に入れずに引用度だけで評価するのは間違いであろう。違う分野の雑誌を JCR で評価することは，注意しなければならない。JCR の使用に関しては，一定の制限があることを認識した上で使用するなら，その有用性はますます大となる。

JOURNAL CITATION REPORTS

CITING JOURNAL PACKAGE

	CITING JOURNAL / CITED JOURNAL	NUMBER OF TIMES THIS YEAR WAS CITED IN 1974											
		TOTAL	1974	1973	1972	1971	1970	1969	1968	1967	1966	1965	REST
2.12	ANN PHYS-NY	3029*	36	251	363	322	278	246	187	166	120	154	906
	PHYS REV	588	0	1	0	0	0	100	87	49	37	4	310
5.05	PHYS REV LETT	234	3	30	44	34	20	13	14	12	10	11	43
2.12	ANN PHYS-NY	213	10	24	26	32	22	10	8	8	5	12	56
2.72	PHYS REV D	199	7	40	61	49	41	0	0	0	0	0	1
2.42	NUCL PHYS A	127	1	11	24	20	28	14	9	20	0	0	0
.99	NUOVO CIMENTO	123	1	5	13	10	4	8	6	12	7	13	44
3.42	PHYS LETT B	114	1	24	27	14	17	18	6	7	0	0	0
2.64	NUCL PHYS B	103	3	23	28	18	10	11	8	2	0	0	0
2.61	PHYS REV A	90	4	17	20	14	24	0	0	0	0	9	2
	NUCL PHYS	74	0	0	1	0	1	0	0	0	13	10	49
1.04	J MATH PHYS	73	1	6	9	11	7	7	2	8	2	5	15
2.86	PHYS REV B	71	0	7	6	8	0	0	0	0	2	27	21
.66	SOV PHYS JETP*	61	0	0	5	6	4	3	4	2	1	3	33
21.50	REV MOD PHYS	58	0	1	3	3	1	2	1	12	0	3	32
2.21	P ROY SOC LOND A MAT	45	0	0	2	1	3	1	0	0	1	1	36
1.42	PROG THEOR PHYS	43	1	0	2	3	1	5	0	3	3	4	21
	PHYS LETT	40	0	1	0	0	0	0	0	0	9	16	14
2.29	PHYS REV C	39	0	10	8	7	14	0	0	0	0	0	0
	ALL OTHER (254)	734	4	51	84	92	81	54	42	31	30	36	229

図1. Journal Citation Reports, Citing Journal Package の一部。説明は本文参照。

Science や Nature のように一般的な雑誌と，限られた専門分野の雑誌を含めて雑誌全体を順位付けていくことは，困難である。しかし図書館という共通の場では，蔵書構成においてそれらの雑誌をバランスよく収集していなければ，十分図書館としての機能を果し得ないのである。現在，日本のあらゆる大学，研究機関においては，予算不足と定員不足で通常の研究すら遂行しにくい状況にあり，資料の充実はもとより現状維持さえ出来なくなっている。しかも学問の進展そのものが，新たな境界領域の出現と既存分野の細分化が加速度的に進行している。このような厳しい現実の中で，一機関の枠内での資料の収集はむつかしく，特に雑誌の購入費を確保することは大変困難である。現に多くの部局で雑誌の中止が検討されている。一般に雑誌の取捨選択は，慣習的に行なわれてきている。しかし，その慣習的な方法が科学的なものであるかどうか，あるいは他により科学的な方法があるかどうかについては，十分な検討がなされてこなかった。しかし，既にみてきたように JCR は，このような方法を作る上での有効なツールであり，小さな分野，小さな図書館でも効率のよい working collection を作ることが出来るのである。

このような working collection を結びつけていくことによって，全学的に有用な図書館のネット・ワークを構成することが必要である。

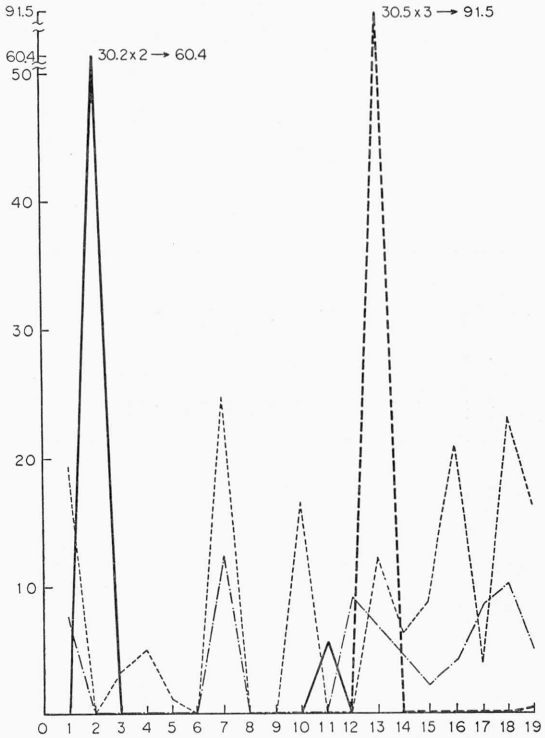


図2. core journal 群における被引用雑誌の被引用比率。縦軸は雑誌の被引用比率，横軸は core journal の雑誌番号。——— は Astronomy and Astrophysics, ——— は Nuclear Instruments and Methods, ---- は Physical Review, ——— は Physical Review Letters を表わす。

尚，物理学教室の調査と分析は，当教室の51年度図書委員会が行ったものである。

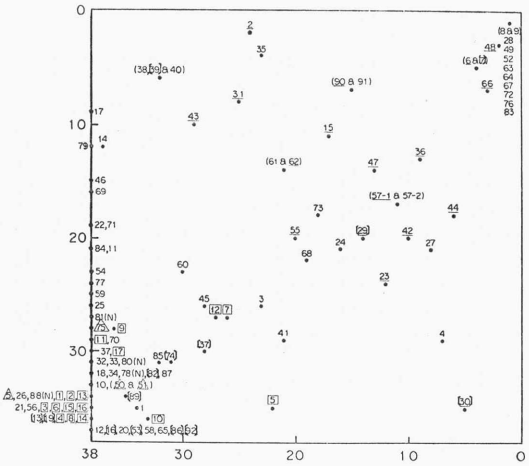


図3. 研究者の要求度と被引用比率との相関図。縦軸は研究者の要求度に基づく序列，横軸は被引用比率に基づく序列。数字は雑誌の番号である。数字下のアンダーラインは core journal，□ は現在は共通図書費で購入していない雑誌，〔 〕は1977年より中止した雑誌，(N) は新刊誌，△ は抄録誌を表わす。

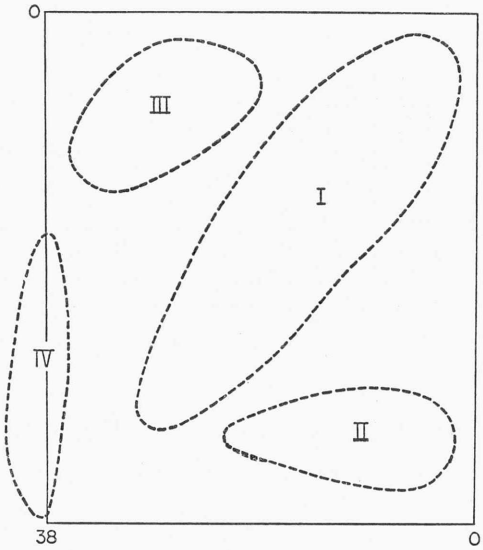


図 4

資料紹介

☆ **教官文庫**（昭和51年度）受入順

○野間　光辰「新修京都叢書　第11，20，22巻」
○飯沼　二郎「沢崎堅造の信仰と生涯」
○浜田　　敦「三本対照　本文編　捷解新語」
○上田　正昭「古代再発見」・「道の古代史」
○永野　芳郎「比較言語学入門」
○石附　　実「国際化への教育」
○広江美之助「景年写生帳　草花１～４」
　　「桜と人生」，「自然農法私考」
　　「自然食　山海の野草」
○北川善太郎「現代契約法入門」
○河野　健二「産業構造と社会変動　１～３」
○小西　一郎「構造動力学」
○山口　昌哉「非線型現象の数学」
　　「数値解析の基礎」
○上田　　篤「山岳都市の研究　１」
○福井　謙一「化学反応と電子軌道」
○西山　卯三「現代の生活空間論　下」
○小林　芳正「建設における地盤振動の影響と防止」
○高安　国世「新樹　高安国世歌集」
　　「詩と真実　高安国世歌集」

☆ 昭和51年度**学生用図書**高額分購入一覧表

1. 高麗大蔵経　第１巻—48巻
2. 赤外線スペクトルチャート
3. 有価証券報告書総覧（第１部上場会社）51年刊行分
4. Aufstieg und Niedergang der römischen Welt. Tl. 1～2
5. Beilsteins Handbuch der Organishen Chemie. 4. Aufl. 4 Erg.-Werk, Bd. 2/3, Bd. 5/1, 3/4 Erg.-Werk, Bd. 18/2～18/3
6. British Parliamentary Papers. 1800～1899. Vol. 1～46（10，31，35，43欠）
7. Science Citation Index. 1970～1974
8. The National Union Catalog, Pre—1956 Imprints. Vol. 1～52, 57～484
9. OECD 全出版物（単行本，定期刊行物12種類，非売報告書類）1976年刊行分

※ No. 3，9 は経済学部調査資料室備付

National Union Catalog, Pre 1956 Imprints について

かねて，部局から購入の希望が出されていた上記の目録を，附属図書館に備え付けることになった。

米国議会図書館（Library of Congress）をはじめ，米国，および，カナダの主要研究図書館等，約800館が所蔵する蔵書のうち，1955年以前に出版された文献についての情報を収録した，世界でも珍しい雄大なスケールの総合目録である。米国議会図書館と，米国図書館協会の協力によって，1968年以来，Mansell 社より出版が開始されたが，はじめの計画によると，毎年，約60冊（1冊は704頁位から成る）づつ出版を続け，10年がかりで全610巻を完結する予定であった。完結すれば，米国，カナダのみならず，ヨーロッパやアジア等，世界の各地で出版された単行書，パンフレット，雑誌，地図帖，楽譜など，約1,300万タイトル（参照を含む）に達する文献を収録することになる。また，その分野も，自然，人文，社会科学等，全域に及ぶ。中には，すでに，絶版になっている図書や，稀有の貴重書も散見される。それらの文献を所蔵する図書館名も記号によって記載されている。したがって，目指す文献が，本学や，日本国内に所蔵されていない場合には，この目録を検索して，見出せば，その文献の所蔵館に複写を依頼することも出来る。

このたび本館に備え付けられたのは，Vol. 1～484 であるが，そのうち Vol. 53～56 の4冊は，膨大な量にのぼる“Bible”の部分を掲載するため，出版がおくれている。しかし，ここ2，3年のうちにその分をも含めて，全巻が購入されれば，すでに本館が収蔵している“National Union Catalog” 1958～1962；1963～1967；1968～1972の各5年累積版や，1973，1974，1975の各1年版，および，その後の月刊，季刊の各号をあわせて，米国の全国所蔵目録は最近のところまで，すべて本館に揃うことになる。なお，1958—1962の5年累積版は，内容的には，1956—1962の7年累積版であって，Pre-1956年版を継ぐものである。

この目録は，整理課事務室（一階，目録カード室の隣り）に備え付けていますから，どなたでも利用できます。

大学図書館界の動き

近畿地区国公立大学図書館協議会

○**図書館施設研究集会**：4月27日（木）大阪女子大学附属図書館の施設研修を行った。同館は堺市内に昭和51年5月31日に竣工された鉄筋コンクリート4階建ての近代的建物であり，利用対象の学生数は全部で700名であるが，視聴覚室や貴重書庫も備えた機能的な図書館である。当日は近畿地区の大学図書館から15館約50名が参加し，館内見学の後，熱心な質疑応答があり，盛会のうちに散会した。

○**総会**：5月25日（水）姫路工業大学附属図書館を当番校とし，姫路市市民会館において当協議会の総会が開かれた。近畿地区の国公立大学図書館の館長・事務（部）長および文部省からの出席を得て，約70名が参加した。前年度の事業報告および文部省の昭和52年度文部省予算資料による大学図書館主要事項の説明の後，今年度の当協議会の活動方針について協議した。今年度の主な方針は次のとおりである。

1) 統計委員会は終了するが，当協議会としてその成果は文部省および日本図書館協会に送り，利用してもらうように依頼する。
2) 機械化委員会は継続する。
3) 施設研究集会は実施する。
4) 講演会は実施する。
5) 館長懇談会は大阪地区で実施する。
6) 主題別研究集会は法律系について最初は準備会的なものを開く。
7) 来年度の総会には近畿地区私立大学の代表をオブザーバーとして招く。

第24回国立大学図書館協議会総会

6月2日～3日，東京の一橋講堂および如水会館において標記の総会が開催された。

〔第1日〕は諸報告，協議，研究集会等が行われたが，その主なものを紹介すると，

各調査研究班ではまず**図書館機械化調査研究班**が①大学・研究図書館機械化の現状とその展望，② MARC の利用とその将来，③学術雑誌総合目録とデータベース，④日本 MARC と大学図書館，⑤大型学術情報データベースと大学図書館等の5項目について報告書を作成中，**「大学図書館改善」調査研究班**は「国立大学図書館改善要項改訂のための試案」を4年にわたる調査研究の成果としてとりまとめた。**外国雑誌調査研究班**は第1年次（昭和50年度）の作業を締めくくる意味で「主要二次刊行物収載外国雑誌の国内所在分布調査集計表」を作成，また第2年次のアンケートについて「一括契約購入外国雑誌に関するアンケート」集計表を作成した。

図書館相互協力調査研究班は①国立大学附属図書館文献相互利用綱領，②文献複写申込書式，③著作権法と大学図書館の文献複写，④文献複写の方法，⑤文献複写事務手続についての要望事項をそれぞれとりまとめた，等の報告が各班からなされた。

研究集会は「大学図書館の基本問題をめぐって」というテーマで行われ，はじめに**大学図書館基本問題特別委員会**の報告という形で安藤委員長（東大）から基本問題の論点となった大学図書館の性格，地位役割，管理体制，財政問題，中央図書館と部局図書館，教官専任および専門員，機械化，選書体制，相互協力等についての討議結果の紹介と意見が述べられ，短時間ではあったが有益な討議がなされた。

〔第2日〕は分科会が行われ，**第1分科会**（一般事項および運営に関する問題）では，①大学院での図書館学教育，②図書館資料の収集選択，③中央館と分館，部局図書館（室）との関係について等について，**第2分科会**（予算，人事）は，**予算問題**では，①図書館維持費，②図書購入費，③冷暖房設備，④研修旅費，図書館調査研究の助成。また**人事問題**では，①職員の増員，②時間外開館対策，③事務機構の整備と職制定数，④待遇改善等について，さらに**第3分科会**（サービスおよび技術的問題）では①基本的文献の整備・利用に関する図書館相互協力，②図書館における講演会，展示会，映画会等の在り方，③図書館業務の簡素化，④身障者学生の受入対策，⑤学術雑誌総合目録人文科学欧文篇（改訂版）の早期刊行（これは新要望事項）等について討議が行われた。なお各分科会から出された要望事項は7月4日の常務理事会でとりまとめられる予定である。

本年度岸本奨励賞は東京大学総合図書館目録業務機械化研究グループ他3者が受賞した。またこの奨励賞は国立大学図書館協議会賞と改称することになった。

人事往来

ファーリィ博士：米国の国立農業図書館の館長であるファーリィ博士は日本における農学図書館の実情視察のために来日し，5月14日（土）本学を訪問した。午前中は附属図書館の見学の後，農学部図書室を見学し，学部長および図書委員長と懇談した。午後は農学部の図書職員を中心とし，自然科学系の図書職員もまじえて約1時間半にわたり農学図書館の問題について親しく意見を交換した。

京都大学附属図書館報「静脩」 Vol. 14, No. 1（通号54号）1977年6月30日発行・編集：静脩編集委員会（責任者附属図書館事務部長） 発行：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電大代751—2111（内線）2611～2641